

## 「もっと広いところで野菜づくりをやってみたい！」

55歳で神戸から丹波に移住、野菜づくりの日々

星見 美乃里さん (69歳) (丹波市青垣町)

いきがい農業コース第3期 (H18年3月修了)

インタビュー 令和3年9月

### 1 なぜ、農業をしようと思ったか

故郷は宇和島で、実家は田んぼも作っていたが、農業との関わりは幼い時に作業を眺めていた程度だった。

緑の多いところに住みたいと考え、阪神淡路大震災の前年(平成6年)に神戸市北区に中古で住宅を購入して移った。しかし翌年の震災で家に少し被害が出た。主人は内緒で、西区の西神ニュータウンの宅地分譲の抽選に申し込んでいた。西神中央の宅地が当たった、と主人から言われた時は息子二人が大学在学中で、一番お金のかかる時期に二重ローンなんて、と渋ったが結局また引越した。

企業勤務の看護師だったが、50歳で早期退職した。神戸市内の自宅が震災で全壊した義母が、介護の必要な状況となったのがきっかけだった。施設に入所した義母のこともありケアマネジャーの資格も取得して、自宅近くの近くの診療所に勤めていた。

その時期に友達に誘われ、介護の合間の気分転換で押部谷や伊川谷で貸農園を借りて、野菜栽培を始めたのがきっかけだった。

私は、先ずは自分でやってみよう、というタイプの人間で、最初はどううまくいかなかった。その頃(平成17年夏)、たぶん新聞か何かで見て兵庫楽農生活センター(以下、「センター」)で生きがい農業コースを開講していることを知って、第3期に応募した。

平成17年8月から受講した。まだセンターのレストラン棟などが完成する本格オープン前のこと。一区画60㎡の畑で、無我夢中で結構作った。

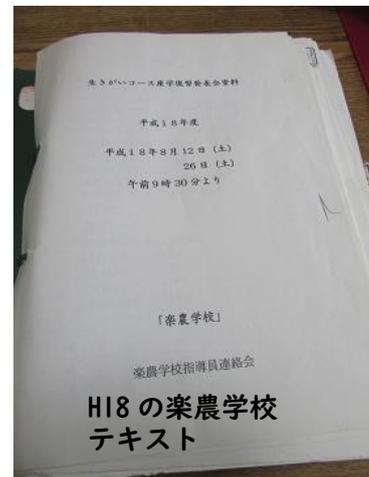
次の第4期は主人が申し込み、畑仕事はほとんど私がやっていた(笑)。その時の講義ノート・資料は私にとって「宝物」であり、楽農生活センターで学んだことは今でも役立っている。

### 2 「もっと広いところで野菜づくりをやってみたい！」丹波へ移住

生きがい農業コースを終えると、貸農園でやっていたのが、だんだんもっと広いところで野菜作りをしてみたい、と思うようになった。介護していた義母が亡くなって、その後のことが落ち着いていたことも大きかった。



工房みのりの前で



H18の楽農学校  
テキスト

最初は神戸の近郊で、緑が多くて農地もあって、と理想を求めていたが、田舎暮らしの相談コーナーなどで調べていくうちに丹波市がIターン希望者向けの宅地を青垣地区で分譲していることが分かった。

実は主人は、根っからのシティボーイ（笑）、都会の暮らしが好きな人だったので、丹波の移住にあたっては、二人で話し合っしばらく丹波と神戸で別居生活をしようと思った。西神の家は処分し、それで得た資金で丹波の分譲地の購入費や家の新築費用、主人が退職まで暮らす西神南のマンションの頭金を捻出できた。

55歳の時、丹波へ移住した。主人は、ウィークデーはのびのびできると喜んでいて。土日は主人が西神南から丹波へ帰ってくる、という生活となった。

初めは、誰も知り合いが居ないこともあり自宅の敷地で空いているところに、畑の土を入れて耕して、畝を立てて作物を育てていた。

その様子を周りから見ている周囲のご近所さんから、「それなら空いているここを使ったら」と私に農地の候補地を紹介してくれる人が現れるようになった。

最初のところは、1反（10a、1000㎡）ほどの荒地。木は生えてなかったけど、ススキが根を張っていて、本当に「開墾」という感じだったので、移住してきているご近所さんにも手伝ってもらって、耕作放棄地の様な状態を農地に戻していった。

そこに毎日足を運んで農作業をしていたら、うちも使ってよと他からも声がかかるようになり、今は全部で5か所、3反弱（30a、3000㎡）の畑を作っている。

### 3 私の野菜作り

センターで農薬や化成肥料を使う慣行栽培を習ったが、自分自身では有機質資材の「保田ぼかし」も取り入れて、減農薬で栽培している。周囲は水稻作でカメムシ対策の薬剤散布をする関係で全て隔離できないし、育苗の時も根切り虫対策で薬剤は用いるので、「気持ちだけは減農薬」でJASの認証は取っていない（取れない）。

肥料は鶏糞、魚粉、油粕などで、牛糞堆肥は初めのうち近所から貰っていたが、最近は市内の大きな牧場がサラサラの牛糞堆肥を作っており、そこから購入している。軽トラック1台で約5百円位。土づくりをするうちに石ころだらけの畑も、（土壌的に）年々よくなってきた。

主人には、ほ場の除草作業や牛糞堆肥の散布などを手伝ってもらっている。

耕うんは最初は備中くわを使って人力でやっていたが畑が増えてくると追いつか



ないので、ガソリンエンジンの管理機2台を使うようになった。

それから、手作業主体で除草もするが、防獣柵と防獣ネットの隙間の草はどうしても手では作業しにくいので、それこそ一か月前、初めて1箇所だけ除草剤を使った。

作目は、たいがいのものを作っている。神戸時代から作っていたジャンボ落花生「おおまさり」、バターナッツ、それからいちごは苗の病気でやめていた時期もあるが今は「紅ほっぺ」を。他に芋、いちじく「榊井ドーフイン」など。ビニールハウスも、使っていていいよと譲ってもらったので施設いちごにも挑戦したが、水管理が難しく、ちょっと手を抜くと「うどんこ病」が出る。正式に施設農業のやり方を学んでいなかったのもので、ビニールハウスは解体した。



いちじくは樹に虫が入ってしまう。虫食い穴のところに薬剤を注入してみたりする。ぶどう（シャインマスカット）は苗木を2回植え付けしたが、生育が良くなく断念した。

家の敷地内に加工場「工房みのり」を作って保健所の検査も受け、いちごやいちじくはジャムにして瓶詰、ゆずは自家製麴を使って、柚子みそに加工して市内の直売所で販売している。

ジャンボ落花生はご近所に分けると評判が良い。バターナッツは今年たくさんとれた。自分の姉妹や独立した息子たちのところにも収穫したものは送っているが、主人も手伝ってくれて、道の駅や直売所へ出荷している。で、売れるとやはり嬉しい。

米づくりも以前、田んぼを借りてやってみたが、作業委託すると米一袋（30キロ）で1万円以上、みたいなコスト感覚で、また、畑が増えて稲作をする時間の余裕がなくなって「これならご近所から分けてもらった方がいい」と思って2、3年でやめてしまった。



それから、昔、丹波の特産品だった綿も、10年前に「青垣和綿の会」が立ち上がり、初年度から和綿の栽培をしている。私は綿を摘むだけだが、和綿の会のメンバーが綿くりをし、染色・機織りを経て丹波布ができています。

#### 4 「田舎暮らしの野菜作り」は「動物との闘い」

有機農法をやっていると、必然的に畑にはミミズが増える。それを目あてにモグラがほ場に住み、野ネズミや狐、イノシシ、鹿、カラスも嗅ぎ付けて寄ってくるようになる。最近は野良猫までやって来て耕したところに大便をして土を被せていく。

移住後に開墾した場所に初めて作付けしたサツマイモが、苗が少し大きくなってき

たなと思った時に囲いをなぎ倒して侵入したイノシシに全部やられた時は、「…私、こんな所で野菜作ってるんやわ」と暗澹たる気持ちになった。

でも、西神の家も畳んでこっちに来ているので、どうにかしないといけないと思って、次から新しく畑を借りると最初にワイヤーメッシュで囲いをして、その外側にトタンを置いて鹿よけのネットを設置する。すると、イノシシや鹿は来なくなる。

あと、カラスは上空から来るし、ハクビシン、ヌートリア、アライグマは柵を越えて入って来るし、それでいちごやトウモロコシの作付けしている所のために何年前かに電気柵を2セット買った。

それも、設置する位置が少しでも高いと隙間から侵入してくるから、草を生やさないように防草シートを敷き、電気柵を上下2段に設置する。

この辺の人はいちごやトウモロコシとかは獣害でやられるから、とってあまり作付けしない。中途半端に対策をしても「また食べられてしまったわ」ということになる。完璧にやらないといけない。それこそ、道の駅で少々販売していても、電気柵等の備品の経費なんかで収支を取ってみたら…（苦笑）でも、収穫の楽しみがあるから（獣害に遭ったとしても）やめられない。

いちごなんか苗から育てて、大きくして実がなって収穫できたら、どれだけ嬉しいか。それを（獣害で）食べられてしまったら、腰が抜けるほどしんどい。

この前も、スイカが100個できていたけどイノシシに50個以上食べられてしまった。イノシシは、さつまいもの匂いを嗅ぎつけて来るようで、トタン板をなぎ倒してワイヤーメッシュもひん曲げて突き破って、3畝のさつまいもを総ざらいで食べ尽くした。次に追肥したばかりで土が柔らかくなっていたジャンボ落花生の畝を、ほとんど実が入っていないのにミミズを獲るついでに全部掘り上げて、帰りのお返しに100個できていたスイカ、株を植えた所にネットもかけていたのに、そこにも入ってきれいに食べられて。この時は現場を見て腰を抜かしてしまった（苦笑）。

反省として、これからその畑ではさつまいもやかぼちゃは作付けをしないと決めた。イノシシってかぼちゃなんか、きっちり種だけ残して、見事に食べてしまう。

イノシシの防除を市役所をお願いして檻の罠も置いてもらったりしたが、掛かったことはない。イノシシも分かっているのだろう。だからイノシシの獣害を防ぐために、



「さつまいもは作らない」。

食い荒らされたさつまいもの後には、熱処理をして透明マルチをして、(地元の公園の花壇の管理にも関わっている関係で) お正月に向けて葉ボタンを3列植えた。

鹿も、家の前の畑の柿の木が、朝行ってみると葉が食べられて、川の土手の側だけ、2、3個だけ残してハクビシンと併せて被害に遭う。落ちていた10個ほどの青い柿を寄せておいていたら、翌日にはそれすらなくなっていた。

獣害は毎年のこと。毎朝5か所の畑を見回るのが私の日課で、イノシシの足跡とか、鹿の糞とか、畑に入っていないかなとひやひやしながら回る。イチジクも、明日採ろうと思っていたのをハクビシンにやられた。でもそれで(畑づくりを)止めたら…。田舎で野菜作りをするのは「動物との闘い」というのが私のアドバイスです。

## 5 「何でも自分でやってみる」

地元とのお付き合いは、ここだけ(丹波市が分譲した住宅地)周りの集落からは離れているが、移住してきた6軒ともに自治会に加入させてもらっている。

平成26年には県立淡路景観園芸学校のまちづくりガーデナーコース(生涯学習課程)で前期・後期の一年間学んだ。明石海峡大橋の割引制度が始まる前で、島内のペンションに3泊4日しながら通って修了した。

働いているときはとても花を育てている余裕はなくて、西神に引っ越した時に少しだけ花づくりを庭先でするようになった。

丹波に移って、地元の7つの集落の連合自治会の前理事長さんに、荒れている地域の共有地を整備してみんなの花壇をつくりたい、と提案したら「ええやなかいか、それしようやないか」と乗ってくれて。県の補助金「県民まちなみ緑化事業」を活用しようと、県民局の緑のパトロールさんの助言を受けながら申請した。そして、地域の花好きのお手入れ会メンバーを募り、みんなで協力して季節の花を植え、地元の人にも喜ばれる庭になった。県への5年間の報告義務も昨年で終了した。毎週第3水曜日の花壇のお手入れ会の日には季節の花の植え付けや、種まき講習などしながらのおしゃべりは、地域での情報交換の場にもなっている。

長寿のため週に1回の「百歳体操」の会のお手伝いも始めた。独居老人の人も、公民館に車や歩いて集まってきた、30分の体操をして少しそこでおしゃべり(情報交換)をして、じっと家に閉じこもってなくて、出てきてくるのが大事で。自治振興会からの補助金で3か月に一回の茶話会があり、地域の情報交換の場になっている。立ち上げからもう5年になる。

8年前には花好き仲間が集まった「たんばの森花くらぶ」(結成20年)に誘われて入会し月に1回の研修会(講



星見邸のお庭

師を招いての植物の話や、剪定教室、寄せ植え研修等) や年に1回「丹波篠山オープンガーデン」を主催して、丹波市・丹波篠山市から公開したい自慢のお庭を募集し、今年43軒の庭を県の内外に公開していただいた。

2年前にはやむを得ず、会の代表(任期3年)を引き受け、コロナ渦で四苦八苦の活動をしている。丹波市、丹波篠山市の会員35名で、お隣の丹波篠山市の花仲間との交流のおかげで、自分の住む地域以外のことも知ることができた。

ところで今の家を建てたとき、薪ストーブを設置してもらった。その燃料の薪をどうする、というときに「山のボランティア」に参加して、チェーンソーの使い方を教えてもらった(主人は使わない)。移住した頃、私の車は軽乗用車だったが、軽トラックと交換した。カシの木はないけれどスギとかヒノキは間伐をするときに、「うちの山の木、あげるよ」という話があると、主人と二人でチェーンソーを積んで軽トラックで山へ行って、私が切り倒して、主人に手伝ってもらって軽トラックに積み込んで、これもご近所さんから「もう使わないから使っていいよ」と言って貸してもらっている納屋に運び込んで、乾燥させる(生木をそのまま焚くとストーブが痛んでしまう)。最初は三木で買ったマサカリで薪割をしていたが、結果的に油圧の薪割器を使うようになった。主人が手伝ってくれるけど、薪も自分で運ぶ。



この辺は加古川の源流で、お世話になっている人も堆肥で土づくりしていて、とてもおいしいお米を分けてもらっていて、都会の知人にも声をかけて分けてあげている。

でも、以前はご近所からお米を分けてもらうとき、30kg入りの袋でも平気で運んでいたが、さすがに最近は米袋を運ぼうとすると膝が折れてしまい運べなくなった。でも、25kg入りならまだ運べることが分かった。米袋は30kg入りが既定だから嫌な顔をされるかなと思ったけど、思い切って、みんなで声を上げて25kg入りに変えてよ、とお願いして変えて貰った。そうすると他の人からも、「楽になった」と喜ばれた。

先の花壇の時もそうだが、地域の人は一般的に「保守的」で新しいことに対して一歩下がるが、実際にこちらが新しいことを始めてみると、悪いことではないし、協力もして喜んでくれる。

## 6 田舎暮らしで大切なのは「ご近所お付き合い」と「情報収集」

直売所に出荷をしているが、周辺の先輩農業者からすれば「楽しみ」、「趣味」という感覚で見られているだろう。以前、ある地域の方から「あなた方は企業に勤めてた

くさん給料や退職金も貰って、丹波へ移ってきて田舎暮らしをしてええなあ」と言われたことがある。I ターンで来た住民と地元の住民とでは、意識の上で「間」(距離)があると感じる。この距離感をどうやって詰めていけるか。ひょっとしたら一生、そこは詰め切らないかもしれない。

地域では日役とか、地域との付き合いがどうしても出てくる。(私たちの住宅地の会員は、地元の神社のお世話(お宮番)は免除してもらっている。境内やお墓のお掃除、供花のお世話にいたるまでされているようだ。)

いっぽうで、知り合いの移住してきた住民の中には、家族が「もうたまらん」と言って都会に戻ってしまった人、「のんびりした暮らしをしにここへ越して来た」とあまり地域にかかわりを持とうとはしない人もいる。

景色がきれいだから、とって移住してきて、来てしまったらそこに溶け込むほかない。私は「野菜作りがしたい」という一心で情報収集も何もない状況で入ってきた。、移住者の人が集まって住んでいるところだったから良かったこともある。

田舎暮らしの中で、地域とお付き合いをしようと思えば、自分からあちこち聞いて回って積極的に動かないといけないところがあると思う。

田舎暮らしを実践するにあたっては、「ご近所付き合い」と、(移住する前も、そしてしてからも)「情報収集」が大切だ。